

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和四年一月廿八日印刷納本

昭和四年二月一日發行（每月一冊）
（一日發行）

山とスキー

第九十號



札幌 山とスキーの會 發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次 目 號 十 九 第

.....

記 事

記憶の中より

宇 都 宮 高 (一)

シユネーケンデに於ける二三の誤謬について

加 納 一 郎 (七)

冬の然別沼

伊 藤 秀 五 郎 (七)

寫 眞 版

空沼岳御滑降中の高松宮殿下

空沼小屋

昭和四年二月發行



空沼岳御滑降中の高松宮殿下

記憶の中より

宇 都 宮 高

圖らずも、高松宮殿下に御供をして、手稻並空沼附近の山を歩き廻つた事を、非常な光榮と思ふ。

今こゝに永久に忘れられない殿下のシユプールとヒユツテ御泊の御様子を記憶の中から書き盡す積りだ。

一月二十一日

窓硝子の薄明くなつた時分、鐵瓶の凍つた水をみつめながら札幌驛にかけつけた。随行する學生は、元氣ある表現と、各自獨得の氣分を以て時を待つた。

七時四十分發、何時も我々が味ふ様に、三角山、手稻山の曲線、森の影が同じ様に充分に車の音に反映してうつつた。

八時半輕川を出發。殿下の御輕い足どりは只頂上にのみ向けられた。輕川から約一時間と行かない内に吹雪が襲來、然し大したこともなく吹き去つた。殿下には御疲れの様もあらせられず、豫定の時間より早くバラダイスヒユツテに御到着遊ばされた。雪のふんわり積んだ屋根、丸太の壁を興味深く御覽になり、餘談の中に過ごされた。

殿下の「オン・ユアーマーク」の元氣ある御言葉で、頂上へ御出發遊ばされた。天氣恢復、風も止んだ。白樺の林は靜かに光を浴びてゐる。デックザックの跡、映する影法師、みづきの可哀相な枝に印象づけられる。

雪扉の下で休む。元氣ある殿下の御言葉の中に記念撮影をし、少量の食物を取り又登り續ける。

クラストをなした頂上一帯はうすほんやりしてゐる。ユートピアのタンネン林が時々眼にとまる。十二時二十分に頂上に達する。殿下の痛快さうな御微笑を拜して吾々一同恐縮に堪へない。すぐ来たコースを取り下山す。

御上達の早い殿下のステムターンは御見事なものだ。あらゆる機會にスキー術を練習する吾々は恥ぢざるを得ない。

午後一時頃だつたと思ふ。愉快に御下降遊ばされ、ヒュツテで御中食なさる。痛快な轉倒ぶりや、ターンの妙味に語りひを續けられる。

二時過ぎ大曲りを歸路に取られ輕川に向はせられる。ヒュツテを出てから一時激しい吹雪に出會ふ。然し困難なコースにぶつからず無事に下降が出来た。三百米あたりの斜面で、小吹雪になつたのを幸ひ、殿下御自身御熱心にステムクリスチャニアを練習遊ばさる。約一時間餘り費す、それから輕川まで痛快な滑降、何んのショックも無い、雪の浅い何とも云へないものだつた。

無事に今日の日を豫定の如く過ごし、愉快に頂上を極めた事は喜びに堪へない。心残らない氣分にひたる。車の音は思ひ浮ぶものに調子をつける。

一月二十二日

朝の人通り稀なる街道は、ほんやりした電燈が、雪の間に流れてゐる。

向ふ三日間、殿下と御一緒に、空沼小屋で寢食を共にし雪の山に親しまうと思へば、万事好都合に、天候恵まれんことを祈る。

豊平驛七時御出發になる。朝雲にかゝる紅色は、連山に餘波を送つてゐる。

石切山から湯の澤まで馬橋、數十臺連續し、鈴の音は一段と響く、大分寒い、足の先がきり／＼いたむ。九時三十分湯の澤に着く。そこそこにしてそこを出發する。

道の針葉樹はゆつたりと佇んで、その間に一行の姿は消えて行く、約十五分ばかりして万計澤に沿ふ。だら／＼した傾

斜面、所々に笹が頭を出してゐる。時に異様な音が傳はるが照りつくした光は樹林の間からひらめく、歌を知らない小鳥が影を残して飛び去る。

十一時中食、皆んな快晴に微笑む。殿下と大野部長の御快談が聞える。澤の水の音はやさしい谷間の子守だ。樺は谷間に枝をさしのぼして、わが耳によき調をもたらせよと待つてゐる。神秘的な氣で順調にコースを進む。一時半小屋に着くそれと同時に殿下の御口から

『素敵だ、勉強したい時はこゝに限るよ。』

と仰せになる。小屋の南側で御急ぎになり記念撮影遊ばさる。部屋のストーブは盛んに燃える。その傍に御疲れの御様子もあらせられず御物語りの中に御茶を召さる。

三時頃から附近のスロープで御練習あらせられる。痛快にステムクリスチャニアを決行遊ばされ、中々の御上達、我々スキー老年者を壓倒遊ばさる。

夜の集ひ、アザラシ、手袋がストーブの上から原始的に乾かされてゐる。何とも云へない氣分、御物語りは次から次へ傳はる。ビスケットをかぢる異様な音は御茶をそよる、外は静かな月の夜だ。万計沼の上に灰色に月が照つてゐる。針葉樹は、それはそれは美しい星空をうち眺めて、たうとき幻にこゝろうたれてゐる。

一月二十三日

九時空沼岳に向つて御出發遊ばさる。薄い雲がかゝつてゐる、豫想通りの天氣らしい、思ひきつた歩調を取る。空沼岳のテール附近に來ると日が照り出す。雪のついた松は天國の御殿の庭とも拜せられ、冬の山のおこがれとも輝く、うづくまつた樺の枝に雪がどつきりくつついてゐる。その影から兎の足跡が澤の方を下りてゐる。

十時四十五分頂上に達する。風は大して無い。喜び切た大野部長は、殿下を御前に万歳を三唱する。

うすい雲のため惠庭岳、漁岳は見えないが漁岳の裾野が長く横はつてゐるのが見える。少し頂上から下つて中食を取

る。雪質の好い、浅いものだからちよつと遊びたくなる。殿下も御元氣なステムターンを遊ばされ、皆もそれにつれて滑り出す。

時間も早いし、その上好天氣と來たから狹薄岳へも一舉に登る。眞簾湖の平坦な所は可なり風があたる。然し砂漠の様な一種特別な味がある。そこからアザラシを取り付ける、空沼入澤の凹凸の甚しい所は一種別感を抱かしむ。

白樺の林も過ぎ幾つかの峯を越して、前に聳えた狹薄のテールに來たのが一時三十分、それから又白樺の純林に入り込む。壓迫された様な、反對に放免された様な氣がする。澤の下まで續いた此の林は何時絶えて、何時生れるだらうかとつまらない愚念を思ひ浮かべせしめらる。

一時五十五分、四面の曇つた時頂上に達する。こゝでも渡邊御用掛りの万歳三唱で氣分を出す。

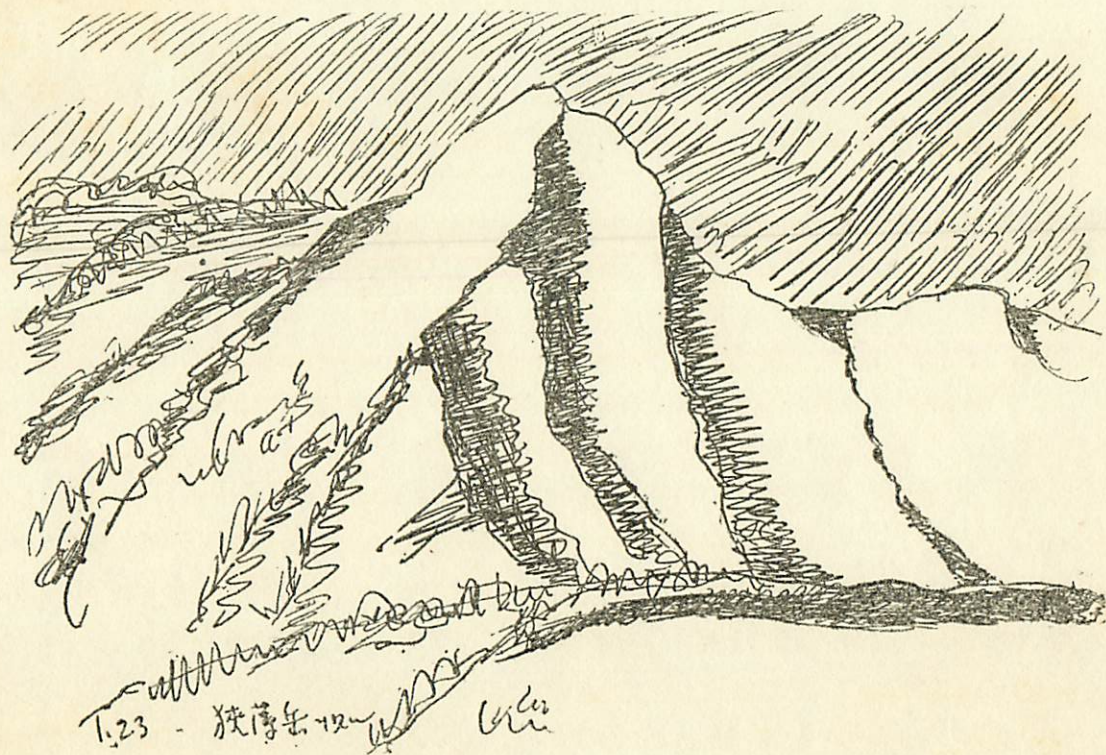
歸りに面白いスロープを御選びになり、御練習になる。人里遠い山中で、思ふ存分雪に親しみ、自然と融合し、清らかな人生觀に生きるのは若い者の尊き生活に違ひない。又とないその日、一瞬一瞬に異つた生活の立場に立つ我々は出來るだけ多くの清らかさと、純道を踏む機會が欲しいものだ。只單に滑つて倒れる、雪の浸り入つたその氣分でさへもその味が幾分得られる。有形的に考へずに、心理的に考へて見た時に、ほのかなその姿が見える。今殿下と御共に吾々が雪と親しむ氣分は永遠に絶えない生活觀だ。

鳥の群と反對に眞簾湖を横ぎる、靜かな樹林を無茶に荒しながら一途に小屋に歸る。着いたのが四時二十分だ。

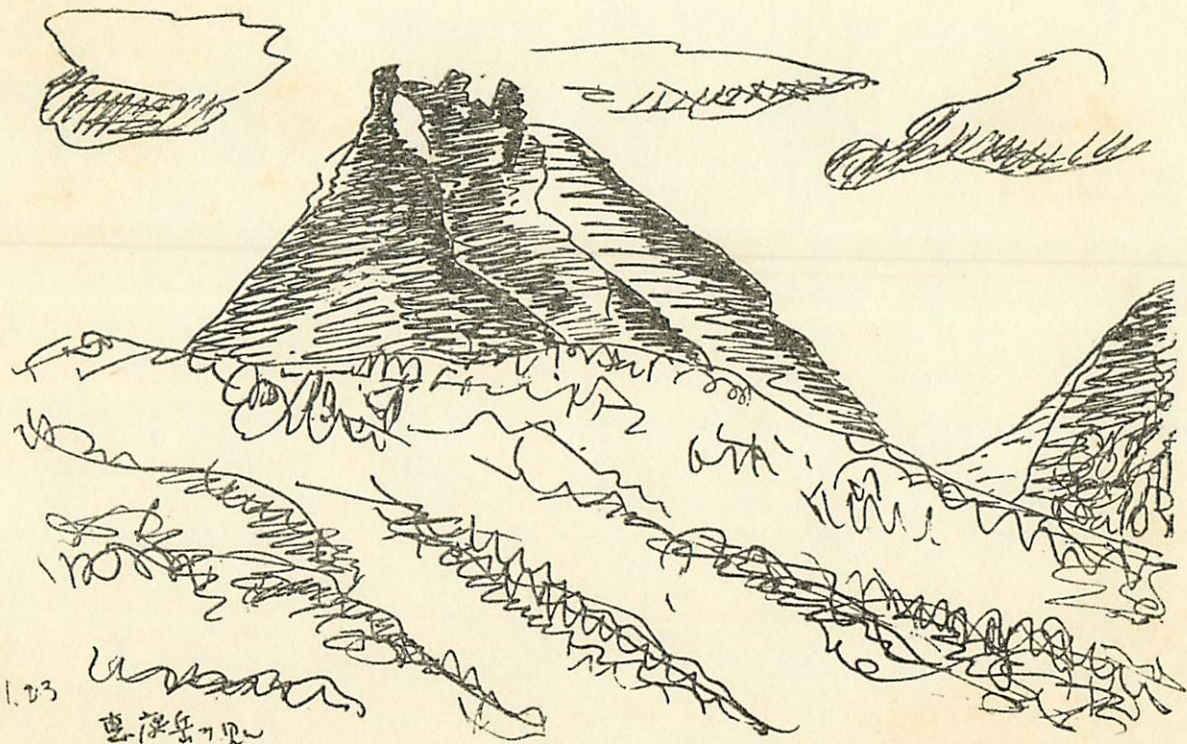
勝ちほこつた氣持ち、豫想以上山を征服し心残りの無い満足し切つた感じが夜の靜けさと共に増して來る。月は昨夜の如くかゞやいてゐる。万計澤の水音は絶えず流れ行く。針葉樹の間から札幌の燈りが見える。殿下にそれをお知らせすると、大野部長と共に外に出られ、しばらくして御愉快に御歸りになる。

『札幌を見て來た』と御喜びの御表情を皆んなに向けらる。

一月二十四日



1.23 - 狭薄乐坂 *W. C. C.*



1.23

惠安岳ヲ見



今日も望み通りの天気、八時五十分札幌に向ふ。

峯の連なり、雲の落ちついた形は殿下の御登山を歓迎してゐる。初めて取つた此のコースだけに澤の分れ目なんか来ると注意がいる。然し連峯識別簡單なため案内もものどつた。一二ヶ所ブッシュの密生に立入つたが餘り大して困難を感じなかつた。殿下は昨日の山スキ一の御経験等からして御進歩されたキャラクターを拜し、何時も平民的な御活潑さに恐縮する。

峯傳ひの千百二十米に来る。ゲレンデスキーに恵まれた所だ。豫定より一時間早く十一時二十分に着いたのには驚いた。その影で中食を取る。ほかほかした天気だがしばらく休むと寒さが身にしむ。雪質の良いのを見ると可なり低温らしい。

札幌岳のテールから頂上まで非常な急斜面なので、その上浅い雪のため横滑りが苦しい。頂上の光つた雪面を見た時は興奮した一種の痛快さを感じた。十二時五十分頂上に着く。此處でも殿下の合圖で万歳三唱、その聲は遠くの峯まで反響す。からりとした雪の間に白樺が微風につましげに微笑み、連山の頂きは雲の間に酔つてゐる。

林の間を注意した動きで下り始める。たつた今登つた頂はもう遠く背後に聳えてゐて太陽を受けた光澤は魅みがへつた姿をしてゐる。表現されないその美と曲線はいつまでも脳裡をさらさない。

好きな千百二十のスロープ、誘惑を興へる。こゝで少し御練習遊ばさる。御休みのない御元氣な御姿はスロープに深く刻み込まれる氣持ちがする。

影なす松の柔かい感じは歸路をさまたげる。札幌岳の雪屏の影は力強い線を引いてゐる。孤獨の感じを興へる狭薄岳は半面大きな影でうすほんやりしてゐる。その間の深い谷は暗黒の密林を思はしめる。枝の間から遠くの角ばつた惠庭岳、光り輝いた大空に呼び掛ける頂がちらつく。

殿下の御活潑な歡聲を聞きながら四時五分小屋に着く。

最後の夜は来た。殿下の御親しみ深い聲も今日限りと思ふと恐れ多いことだが惜しい気がする。最後の御名残りの又喜びの御乾杯がある。つゞみきれない表情は享樂と共に深くなつて行く。

しばしして殿下におかれては小屋の名簿に、「空沼小屋」*Soramizakoya*と御命名を記るさる。雑談も盡きせず夜の静まりも忘れられ、時の過ぐるを知らず。

一月二十五日

朝の時間を御利用遊され附近のスロープに最後の名残りを惜まれる。白樺の林は吾々を抱擁して堅く立つてゐる。

小屋での御中食をこゝくにされ万計澤を御下りになる。湯の澤まで一時間半、コブの多い下り坂だ、あきが来る所だが一種の快味がある。

堂本の小學校の裏から峯傳ひに石切山へ下降される。小さく連なつたスロープ、下つたり登つたり一般的の練習地には最適の峯だ。殿下の御あざやかなホーム、そして最後のボーゲンは今も形として残つてゐるが、それは確かなターンと拜する。

殿下に續く最後のスキー歩行は夕日を浴びて、色々の記憶はうす雲に提示されて行く。



空 沼 小 屋

シユネークンデにおける二三の 誤謬について

加 納 一 郎

まゑがき——この原稿は實は昭和三年の三月にこの雜誌にのせるつもりで書いたものです。それを今日までうつちやつておいたのは二つの理由があるのです。一つはこの原稿の内容と關聯して大島亮吉君の高教を仰ぎたく思ふことがあつたので、同君に私信を送つたところ、全く不幸なことに、大島君はあの悲しむべき最期の、穂高岳にてかけられた後で、僕の手紙は永久に披かれずに終つたため、何だか氣が進まなくなつたこととす。第二は中に引用したランの著書が一九二六年に再版せられ、そのうちには僕の指摘する誤謬の個所が全部、削除せられてなり（この點、京大の今西、宮川兩君の御好意を感謝）また實際その誤謬は多少の科學的素養のある人にはあまりに明かなものであり、今日、シユネークンデに志す方々は、今更僕がくだくだしく書きたてなくとも、既に御氣づきのこととも信じたので、送稿を中止したのです。ところが今度發刊された早稻田の「リュックサック」⁶

を手にしますと、氣壓の減少は氷點を上昇せしむるといふことが書いてある。（「冬雪崩」船田三郎君、第四頁）研究の全般に亘つて影響のある大問題ではないが、どうも氣になつて仕方がない。ランの誤謬は「登高行」第四年の第一六三頁及び一六七頁にそのまゝ譯載されてをり「登高行」第五年「冬季登山の或る危険に就いて」の記事中にも「氣壓の減少は氷點を昇騰せしむる」とあり、それに船田君も、これに氣づいてをられぬことを知つたので、今後何かの參考になることもあらうかと、敢てこの舊稿を發表することにきめたのです。

勿論、本稿中、雪達磨論以下は誤謬問題から離れてをります。しかし、濕雪と乾雪との區分點などは「リュックサック」⁶で森田君も解れてをられる（第三〇頁）ことです。ことさら切りすてないでおきました。

— 一九二八・一二・三〇 —

アーノルド・ラン氏がその著 *Alpine Skiing* (1921) 及び *Mountaineering on Ski* (*Mountain Craft*, 1920) に書いた雪に關する該博な知見は、一般スキー家併びに山岳スキー家に大なる啓示をもたらしたことは、人々の既に認めるところであり、僕もまた種々の點でお蔭を被つた一人であるが

その中には二、三首肯し難き記載がある様に思ふてゐた。所が最近、機會を得て、それらの著書を再讀して見ると、氣壓と氷點に關する説明の中に、どうしても錯誤でなければならぬと考へらるゝ所があり、且この關係が、單に同書に關する限りでなく、より根本的な問題に關聯するものなることを認めたので、こゝに卑見を開陳して、研究家諸氏の御批判を仰ぎたく思ふのである。

勿論、ラン氏は自ら明記してゐることく物理學の理窟にはあまり得意でない様であるから、錯誤を指摘して氏をせめんとするのはなく、多少とも科學的な考慮を拂はれる同好者の參考のためにするものであることを斷つて置く。

第一の問題は降雪時の氣温に關するもので、*Mountain Craft*, p. 405 に次の記載がある。

「雪は氣温が一度か二度のときにでも降る。私は海拔五、

五〇〇呎の高さで、氣温攝氏二度のとき、粉雪の降るのを見た。同様にアイスメーカーは氷點以上の氣温時に、リンクの凍るのを知つてゐる。

この異常な現象の説明は壓力が氷點を低下せしめると云ふ周知の法則の中に見出し得る。このことは當然氣壓の減少は氷點を上昇せしめるものであると歸納することができ。攝氏の零度は海面上に於ける水の結氷點で、その海面上の氣壓よりも大なる壓力の下では氷點は降下する。これ氷河底が氷點以下の氣温時にも液化しつゝある理由である。従つて大氣の壓力が海面上の氣壓よりも小なる場合には氷點を上昇せしめる。換言すれば海面上より高き點ではどこまでも氷點は零度以上である。私の觀察したところでは五、〇〇〇呎の高所では氣温が攝氏二度の際に水は結氷し、雨は雪になると信ぜられる。」

Alpine Skiing 1921, (pp. 20) でも同様な記載をなし「海拔を増すごとに氣壓は下り、従つて氷點は上昇する」と説明してゐる。

洵に氣壓と氷點に關する法則はラン氏の云ふ通りであり氣壓の増加が氷點を降下せしめることも、今日まで種々實

驗的に證せられてゐる。この事に就ては昭和二年十二月號の本誌一九二頁の「氷と雪の理學的性質」なる拙稿にも擧げて置いた。しかしこの法則をもつて零度以上の氣温時の降雪現象を説明するのは甚だ無理である。成程彼の云ふところは高所においては一見首肯しうべき説明であるが、低所、俗にいふ平地でも、零度以上の時に降雪のあるのはさまで珍らしいことではないのであるから、この平地の方の説明には殆んど上記の理論は威力を表はさない。

彼の誤謬と云ふより思ひ違ひなんだが、それは氣壓の減少による氷點の上昇をあまりに大きく見積りすぎてゐる點にある。而してその錯誤の原因は同様の關係にある沸點の低下と混同してゐるためではあるまいか。ラン氏の例についていへば、計算式は種々あるが、大体一、五〇〇米(約五、〇〇〇呎)の高所では氣壓は六三五ミリで、之に相當する沸點は攝氏の九五・三度となるが、氷點の方は沸點ほどに氣壓の減少に對して敏感なものではない。氣壓が一〇〇ミリ減少すると沸點は約三二・七度低下することになつてゐるが氷點の方は僅かに一度の千分の一位しか上昇しない。即ち氷點と壓力との關係は一八四九年 James Thomson が理

論上、一氣壓について氷點が攝氏の〇・〇〇七五度の變化を表すことを證しその後、一八五〇年に William Thomson (後にケルヴィン卿とよばれた有名な物理學者)が八・一氣壓の下に〇・〇五九度、一六・八氣壓で〇・一二九度の氷點降下を實驗して、前記の理論的推算の妥當なることを立證したもので、このトムソンの値は今日の物理學者も認容するところである。一氣壓で一度の千分の七の變化、それは普通われわれの使用する寒暖計で見分けあたはぬ些少なものであり、山岳の高さによる氣壓の減少の如き、更に微々たる値より表れないので、五・〇〇〇呎で二度の上昇があるなどとは到底考へられない。

然らば零度以上の氣温時の降雪は如何なる理由によつて説明するか。これは氣層の構成によつて解決せられうる。上方に降雪するに十分なる寒冷な氣層があれば、たとひ地面附近の氣温が零度以上でも、平地にても降雪を見る。勿論地面附近の暖かい氣層が厚いときには、地上に達するまでに雪は雨に變ることもあるが、とけずに落ちてくる場合も有り得るわけである。反對に地面附近が零度以下のときでも降雨のあることも知られてゐるので、すべてかやうな

雪や霰や雹などの降水現象は、氣層の配置によつて説明せられ、必しも地面附近の氣温が絶對的のものではない。零度以上で雪が降つたからとて、驚くには當らぬのである。

ラン氏の如く高層の氷點が零度より何度も上るやうに考へれば、雲の現象が著しく變つて來なければならぬ。また事實、氷點が零度より多少、上ることがあつても、空氣中の水蒸氣は氷點に遭遇して必ずしも直ちに結氷するものではなく、しばしは過冷却の状態にあることは氣象學者の説明するところである。

で、最後に残つた疑問は、ラン氏の云ふ粉雪であるが、之も降雪の種々なる性質が、その時の地面附近の氣温と常に一次的關係にあるとは考へられないのであるから、差支へはないと思ふ。ことに高所では一般に大氣は乾燥の傾向にあるのだから、かやうな温度で粉雪があつても不思議はないと思ふ。

第二の問題も亦、同様の錯誤に基くもので、Mountain Craft, pp. 408-409. で「風はあらかじめ(積雪の)表面を融解せずに、單獨に働いてクラストを作る力をもつてゐる私はどういふわけで、かうなるのかよく知らないが、その

理由は壓力が氷點を低下せしめるといふ法則のうちに見出さるべきは疑ない。即ち風による壓力の増加は氷點を低下せしめる。換言すれば風の作用を受けた點は普通氣温が氷點下であつても、融解を來す結果となるのである」と記し Alpine Skiing 1921. (p. 28) でも同様な事をのべ、その脚註で「一例へば普通氣温が 5° と假定し、風の壓力が氷點を -6° まで降下せしめたとせば、風の作用を受けた積雪斜面は一度の差で融解を起すこととなる。この説明は非常に寒い風のために融解の現象を伴つて、クラストが作らるるといふ、しばしは自分を考へさせた問題に對する單なる推察なのである」とつけ加へてゐる。しかし彼が例證したやうなことが、あり得べからざることは先に解疏した通りの理由で明了である。即ち氷點を六度だけ降下せしむる壓力は實に八〇〇氣壓でなければならぬ。然るに實際の風が興へる壓力、即ち風壓は二〇秒米の烈風で風向に直角なる平面一平方糎に對して四・八瓦なるに過ぎず、更に強力な秒速四〇米の風の場合に見ても二〇瓦に足りないのであるから、一氣壓の五〇分の一にも當らぬわけである。この壓力によつて氷點を低下し、従つて融解を起し、クラストを形成せ

しめるといふ説明は成り立たぬ。

然らばこの問題は如何に解釋すればよいのであらうか。ラン氏は積雪面の變化に關して、三つの素因、日射・風・融解（單に氣温による）を挙げ、各別にてその狀況を述べてゐる。しかし實際に當つては、此等が同時に作用するから、全ての場合に單純な解説をなすことは困難である。この場合にも風だけで説明しようと試みるのは無理ではないかと考へられる。然し強て風だけに就ての理由を考へて見れば、やはり岡田武松氏が雨（第一一八頁）でいつてをられる如く、風が雪面を吹くときにこれに熱を與へて融解を起させるものと思はれるが、これは手軽に數字的に例證し難いのは洵に残念である。

以上に指摘した二點については、それらが如何様に説明せられようとも、スキー家の要求するシユネークンデにおいては、さまで重要な問題ではないかも知れない。

しかし壓力と氷點に關する理窟を、も少し考へて行くと更に大きな疑問に到達するのである。

それで、こゝからはラン氏とは別れて、今一度この問題を考究して見ることにする。

先づ雪を手握つて見て、固まるものと、固まらないものがあることは人々の既に承知してゐる通りで、僕もこれを濕雪と乾雪との大体の區別點として、度々引用したところがあるのである。ところで、手に握つて固まるのはどう云ふ理由であるかを考へて見ると、多くの物理教科書は口をそろへて「それは復氷現象を起すからだ。手で握つて壓力を加へるために氷點が降下して雪がとける。手を離すと氷點は元の様に高くなり、従つてとけた雪は再び氷り凝固するのである」といふ。そして雪達磨のできるのも、これと同様の原理によるとつけ加へてある。しかし壓力と氷點に關する正確な數字を知つた讀者は、この説明に對しても多少の疑問を抱くであらう。將して先に引合に出してもらつた岡田博士も、同書（一三三頁）で「この現象を昔から雪が固まるのは、壓力を受けるから復氷の理で雪が融け合つて又再び凍りつく爲であると説明されてゐるが、一平方糎につき百万ダインの壓力を加へても、雪の結氷點は僅かに一度の千分の七位しか降らないのであるから、手や板で打つた位では復氷の現象は起りそうもない」と説破して「これは主に雪の結晶と結晶とが密接するから、相互の間隙がな

ぐなり親和力が作用するからであらう」と解き、雪温が氷
點に近い時は、雪の粘着性が強いから、雪達磨を作るに適
當である。しかし雪温が低くて、さらさらして纏まり難い
ときでも、雪を手で押しついたり、板のやうなもので打つ
と固まるものであると添加せられてゐる。

雪達磨を復水の理由で説明することは、やはり壓力が氷
點を低下せしめる事實をあまりに大きく見積りすぎた誤謬
に起因する。この點については僕は岡田博士の説に首肯す
るものであるが、その凝集の難易については次の様な見解
をもつてゐる。

W. A. Bentley 氏の研究（これは別の機會に詳述するが）
によれば雪の結晶は同じ六方晶形でも高層で生成せられる
もの、低温時に降るものは *solid form* をなし、比較的下層の
暖かい時に降る雪は、普通に見られる *branching form* をな
してゐる。（これは前掲拙稿附圖で云へば、寫眞の中央の
ものは前者、左下隅のものはまづ後者に屬する）結晶と結
晶とが密接する場合には *solid form* の方が *branching form*
のものより凝集し難いことは明了で、これが低温時に於け
る凝集を困難とする一つの理由となりはせぬかと云ふ考を

僕は抱く。

さてそれでは一体、復水——氷點と壓力とに關する理論
は、どんな場合に役立つのであるか。どれもこれも反對せ
られてしまつては立つ瀬がない様に考へられよう。そこで
これによつて説明せられる適當な例を一つ擧げることにな
る。

だがそれより前に、復水に關する理論をも少し詳しく調
べて見るために、おなじみのチンダル先生やハックスレー、
フアラデーなどの大家連に出場してもらふこととする。

一体この問題の現象を、一番初めに見つけたのはフアラ
デー（一八五〇年）であつた。そしてこれに對して Regulation
と云ふ名稱を與へたのはフーカー博士で、之を文献に初め
て用ひたのは一八五七年に、チンダルとハックスレーであ
つた。フアラデーが最初に觀察したのは、とけつゝある氷
片を二つ接觸せしめると、接觸面が氷結して離れ難くなる
といふ事實であつたが、その後これに關しては色々な實驗
がなされた。そのうち最も著名なのはボトムレーのはじめ
た實驗、即ち氷の棒（ $\times \times \times \times \times$ ）を水平に置き兩端を
何かで支へる。中央部に針金を巻きつけ、その下に一二

一四ボンドの錘をつけて放置すると、その時の氣温其他の關係もあるが大體三〇分位で、針金は氷の棒を通過して下に落ちるが氷棒は依然として切斷されずに残されると云ふのである。

然らばこの理論はどうか。ゼームス・トムソンは壓力の増加が氷點を降下せしむる法則を以てこれを説明した。そしてこれが今日廣く認められてゐるところである。けれども私はこゝに、この現象の最初の觀察者たるフアラデーの所論をも併せて傳へる。フアラデーの考へたところはやはり、壓力による氷點降下は、一氣壓によつて、華氏の七〇分の一度位である。然るに復氷の場合は、その何分の一の壓力でも現象が起る。例へば二つの氷片をいづれも糸につるし、靜かに之を接觸せしめても兩者は氷結するではないか。か様な微小な壓力による氷點の變化は殆んど感じないであらう。

で彼の説は分子の凝集力に依據するもので、水は氷點以下の溫度でも、また沸點以上の溫度でも液体として保たしめることが出来る。これは分子凝集力が、氣體又は固体に變ずることに抗するからである。所が過冷却せる水に氷片

を投入し、或は過熱した水中に水蒸氣を與ふれば凝集力は破れて、直ちに結氷又は沸騰が始まる。全て物体はその内部の分子はこれをとりまく分子に相互に強い凝集力をもつてゐるが、表面においては、一方が自由な状態におかれてゐる。これを氷でいふならば氷片の内部は凝集力が強いからなかなか液化しない。これに反して表面は容易に熱に感じて液化する。そこで二つのとけつゝある氷片を接觸せしめると、その部分の水の膜は、接觸によつて、個々の氷片の表面から、一個の氷片の内部たる位置に變り、強い凝集力を得て、氷結するものであるといふのである。

分子論にまで深入りして大分興味が薄らいだから、今度は元へもどる。先に約束した適例一つ。

それはスケートが滑る問題である。スケーターの全体重が、スケートの底面にかゝり、これによつて壓せられた部分の水は融解してそこに水が出来、水がリユースブリカント（滑劑）となつて滑るものであると云ふのである。だがその氷面を壓する力はどれ位か疑つて見なければならぬ。ごく大略的の計算だが、スケートの底面の長さを三〇糎、巾を〇三糎と假定せば、底面積は九平方糎。それから体重

を平均五五キロとせば、單位面積にかゝる壓力は六一一瓦となり、ほど六氣壓に等しいから、之をトムソンの數値によつて計算すれば、氷點を $0 \cdot 0$ 四五度は低下せしめる。だがスケートの實際は、あの底面をフラットに使用することはなく、常にエッジを用ひてゐる。だからこの荷重は單位面積に就て、更に著しく大となることは明かである。即ちスケートは壓力が氷點を降下せしむると云ふ法則を以て説明せられて支障ないもので、事實これはあまり寒冷な時には、スケートの滑りのよくない事は誰でも肯定する所である。

壓力と氷點の法則がとうとう勝利を占めた。然も、われわれのお隣りのスケートに於て最も手際よく片づけられたこゝなる誰でも、それではスキーは何故に滑るか云ふ考へに到達するだらう。

斜面を下るのだから重力が作用する。勿論、しかしこれは外力の問題で、スキーだけの話ではない。

或人はまた例の法則をもち出して來た。然しこれは短かいスキーよりも、長いスキーを穿いた方が、早く滑り、暖かいときより寒いときの方がよく滑ると云ふ事實で、容易

に打ち消すことが出来るではないか。

これは摩擦の問題になる。

そこで迂遠な話であるが、僕は車を挽いて見る。先づアスファルトの道で。次に砂道で、それから深い積雪の上でその難易については今更報告するまでもなからう。後の場合はど剛性 (Rigidity, Festigkeit) が小さくなり、回轉の摩擦が大きくなる。で雪の上で車を挽くやうな愚をやめて、橋にする。今度はずつと樂に挽ける。回轉の摩擦を迂りの摩擦に換えたからである。普通は前者の方が後者よりも小であるが、雪の場合には反對になる。

橋とスキーとは兄弟である。スキーがあつた長さを持ち、長いほど早く滑るといふのは、單位面積に對する荷重を少くして、積雪面より沈下することを防ぎ、前面及び側面抵抗を少くするためである。沈下すればする程、進む爲にはまだ沈下しない部分へ登つてそれを壓しつけなければならぬ。即ち一時に二尺も三尺も降雪があつた直後では、平地でも一歩々々の運動は登りの運動と大差なくなることは誰でも經驗するところである。

故にスキーの速度は沈下の程度に非常な關係をもつてゐる

る。而して沈下の度は新雪量の大小に比例するもので、之が前面への抵抗となつて表れる。

次に側面抵抗である。これは積雪の剛性により多くの關係をもつ。大体剛性は積雪の密度に關するもので、密度の小なるときは小さい。それが大きくなると従つて大となるけれども、水分を多く含むだ泥狀雪になるとまた小さくなる。しかし新雪の場合は剛性は大きなから、沈下の度は新雪の比重如何よりも、深さに依る方が大きい。側面抵抗の方は直接剛性によつて著しく違ふ。比重が大きいと云れる雪が、滑らないのはこの爲である。またラン氏の所謂テレマーク・クラストが案外よく滑るのは、前述の様に、表面の融雪が多分の水を含み、剛性が少くなつたからによるのである。

第三に關係するものは積雪面とスキー底面との摩擦係數であり、之は一般に小なる値を持つものであるから、前記二つの抵抗をなるべく少くして、この小なる摩擦係數を利用して滑らうといふのがスキー滑行の本義である。しかし積雪面は日射や風や氣温等によつて種々の狀況を表し、夫々摩擦係數を異にするし、またスキー底面の組織も材種や

木目によつて違つて来る。しかしこれは顯微鏡的觀察を必要とし、理論的に討究すれば甚だ複雑なものとなる。がしかし或る程度までは經驗によつて知ることが出来る。スキーテクニクスの最も主要な部分は一にこの關係に依存するものといへるのである。

以上の外に滑行に當つては空氣の抵抗も考へねばならぬが、これもしばらく論外とすれば、この三つの素因、即ち新雪量の大小に關する沈下の程度、雪の剛性に關する側面抵抗、それから底面の摩擦係數とが、スキーが滑るといふことに關して考へらるゝのである。そして前二者はスキーの形態となつて表れ、後者は用材及び取材の選擇となり、又塗蠟法になつて表れてくる。

さて私は斯様に分析して見た。

而しもともどつて、本稿の主題たる壓力と氷點との關係がスキーの方には何の役割をも持つてゐないであらうか即ち先の第三の摩擦係數の輕減の爲に、何等の働きをも表してゐないであらうか。前には輕々しく一蹴し去つたけれども、こゝにも一度考へなほして見やう、僕はスキーの古い條痕が薄い氷膜をもつて光つてゐるのを、度々見掛け

ことがある。かやうなアイス・フィルムの形成せらるゝ原因を、雪がスキーに踏みつけられた時に、氷點降下を來して融け、後再び結氷したものと考へるならば、スキーの現象にも復氷現象が多少とも起つてゐるものと想像できないことはない。

然し乍ら若しこれが働いてスキー滑走の主要素因をなしてゐるならば、スキー底面の平均荷重を増した方が、即ち短いスキーの方が、よく滑らなければならぬ筈であるが、平均荷重の少い長いスキーがよりよく滑る事實は、氷點降下による摩擦の軽減よりは、スキーが雪面に沈下する程度の方が、遙に大なる素因をなしてゐることを示すのである。而してこれは又理論上にも首肯し得る。だから氷點と壓力との關係はスキーに於いては、スケートの場合の様な主役には到底なれないものだらうと僕は思ふ。

こんなことはエビキュリアニズムの側から云へば、余計な話であるかも知れないが、科學的とか合理的とか云ふ看板を掲げる以上は、等閑に附しておけない重要な問題であると思ふ。諸賢の御叱正を得ば幸甚。

〔一九二八・三・二九〕



冬の然別沼

伊藤秀五郎

1

湖みづうみの清朗ハイトルコイトは、一面に張りつめた氷の更に雪に被はれた冬に於て、恐らくはその頂點に達する。鼓けば玲瓏乎として響くであらうその清澄を私は愛する。柳の嫩芽の漸く膨まうとする光豊かな春から初夏には、やまともすると緑を反映した湖水の上に漂ひ勝ちな感傷の、いまはその片影すらも存在しないその冬の湖景を愛する。その自然の透徹した孤獨アイソラシムの中に自らみづかをおくことを私は愛する。そこには何者か湖心深く冥想的な沈潜に通ずるものを私は感じる。

いつたい冥想といふ言葉からは、私達の聯想は直ちに森林に導かれるのが普通である。たしかに森林は冥想の境地

には相違ない。それは實に不思議な魔睡薬をもつてゐて、如何なる險しい感情にも、如何にいらだしい心にも、春霞の如き穏かな睡眠ねむりを與へる。星のやうに淋しくなつて心に荒涼を感じる時に、森林を訪ねてその冥想的な香氣に觸れると、奇態に人は、やさしい老嫗の手を感じ、遠くに温いものを感じて、靜かな夕暮の空のやうな氣分になる。東方古代の思想を生んだあの冥想的な森林は、實に不思議な魔睡薬をもつてゐる。しかしながら、全く粉飾を落脱して仕舞つた冬の森林には、このやうな香氣は存在しない。冬の森林はあまりにも漠然としてゐる。漠然として、そして遠心的である。廣さばかりで深さが無い。だから自己の想念をそこから放射的に遠くにまで展べるには適するだら

う。しかし自らの想念を深く一つ處に掘り下げるには不適當だ。此に反して冬の湖水は飽くまで求心的である。だから一つの點に總ての想念を蒐め、蒐めて而も深め得る。良き反省の機縁である。——人は時に反省を必要とするものだ。反省を忘れた時、人は驕慢になり、無恥になり、獨りよがりになり、挑他的になる。それは自然の中であつても或は假舎の陋室であつても良い、とまれ人は時に反省を必要とするものだ。そして冬の湖は、その爲には絶好の自然の書齋である。

2

冬の然別沼を私が訪れたのは、始めからそのやうな自己濟度の小道を其處に求めて行つたといふ譯では勿論ない。唯數年前からの小さな願望の一つを、此度の機會に満したといふに過ぎない。日高の山へ行く前の一週間を過さうとして、三つばかりの候補地の中から大した理由もなくそこを撰んだといふ迄である。そしてそこで私は、このやうな言はゞ取止めの無いことどもを夢想したのに過ぎないのである。そして自己反省の機會からは、いまだに小さな殼の

中で狐疑し、逡巡し、懷疑し、模索してゐる貧しい自己を見出して、曠大な自然の中に益々自我の縮小を経験した、しかしこれは私自身の問題だ。唯もう一つこゝに書き加へて置きたいことは、孤獨に就てある。それは、孤獨といふことが餘りにもしばしば自己僞構的な態度を以つて不用意に言はれ勝ちだからである。私は、一面に張りつめた水の上に二三寸の粉雪の積つた湖を、ひとりスキーで歩き廻つたり、その湖畔のぬるい温泉にほつんと浴りながらあの孤獨をばその生涯の伴侶とし、その後半生をば全く雲と風の中に没入してしまつたヘンリー・ヘークのことを想つた。彼は實に孤獨を愛し孤獨に生きた。然しながら彼の生きた孤獨とは、決して甘やかな感傷の影に色彩られたそれではなく、孤高にして而も無限の慈愛を胚胎するそれである。孤獨とは排他することではない。排他することには愛もなければ孤獨もない。眞の孤獨はおほらかな慈愛の心による。西行や芭蕉の孤獨は、とりもなほさず彼の強い愛心を語るものである。ヘークの孤獨も亦それである。彼の小著「途と途連れ」なる一本を讀む者は、誰しも彼の心が實に寛かな慈愛に満ちてゐることを識るであら

う。私が彼の孤獨性を愛するのはそれが爲である。若しも彼の孤獨にして感傷の影を宿し、或は己れ獨り善しとする利己主義に發するものであるならば、私は決して彼を敬はない。而し彼は強烈な愛の心の所有者であつた。それ故に彼は眞に孤獨であつた。その孤獨の彼の生活をば、私はこの湖のほとりにあつて靜かに想ひ廻らしたのである。或る詩人は書いてゐる。「教へられた感傷にも關らず僕は最初の詩に於て壯大な砂漠の赫耀たる太陽の没する時を歌はうとした。しかし思へば月と星と云ひ太陽と云ひ同じく平凡な感傷ではないか」と。ヘークの生活も亦感傷であつたかもしれない。しかし私は彼のおほらかな慈愛の心を限りなく愛する一人である。

3
こんどは冬の沼そのものに就いて少しばかり書いてみる毎年一月になると大抵湖沼の全面が凍結して、その上を自由自在に往來出来るやうになるといふことだ。私が行つたのは舊臘押し迫つた二十九日であつたが、もうその数日前から完全に結氷してゐたさうである。氷の上には粉雪が二

三寸積つてゐて、スキーでも自由に歩けた。いつたい十勝の國は雪の少い地方で、おまけに此の湖の上は風が強いので、降つた雪は大方飛ばされて仕舞ふのである。だから湖水の上はいつもそれ位しか積つてゐない譯である。湖畔の温泉に三日泊つた。湯がぬるいのが缺點であるけれども、冬には他にはお客もなく、宿の主人夫婦は至極のんきだし、それに人間離れした岩魚釣の親爺が一人居るきりだから、莫迦に靜閑だつた。温泉に近い驛遞旅館は冬の間は休業してゐて無人だつた。湖畔にある家は現在ではこの二つきりだ。しかし發展の速度の驚く程速い北海道のことであるから、こんな状態が何時まで續くか解らない。それからこの二三年毎冬造材が奥のヤンベツにはいつてゐるといふことだ。今年もはいつてゐて、荷物を運ぶ馬橋が毎日湖水の上を横切つて通つてゐた。だから時にはその伐材小屋の人達が温泉まで遊びに來た。

よく然別は暗い沼だと人がいふけれども、湖面はすつかり雪に被はれ四圍の山々は落葉してゐるせい、冬の間からは少しもそんな感じはうけなかつた。豫期に反した爲か寧ろ私は明るい感じさへうけた程だ。しかしスキーを遊ぶ

やうな處は湖の周圍には何處にも無い。湖を圍む山は、皆んな千二三百米の低いものだが、樹木が密生してゐてスキーには適せない。唯天氣の好い日に東の小沼邊に行つてみる位がせきの山である。それから、雪に被はれた湖の景觀も、特別にとりたてて言ふ程のこともない。四圍の山に生ひ茂つた樹木も多くは細い混交林で、雪の森林としては寂しい位だ。唯、奥のヤンベツの二股の處から尾根を登つて、ウベサンケヌブリから續いてゐる山稜の端の一四〇〇米の峯迄行つた時に瞰下した湖は美しかつた。日が蔭るとそれが恰も燦し銀のやうな重い金屬性の光澤を發つて遠くに輝いて見えた。そういふ色は私は始めてであつた。それは確かに或る一定の距離と俯角とが必要なのであらうと思ふ。そしてそこが丁度そのやうな位置に當つてゐる處だつたらだと思ふが、とにかくその時そこから見た湖の色は、極めて鮮かな印象を残してゐる。それからその峯の頂の針葉樹が莫迦に面白かつた。この邊はワルドグレンツェがかなり昇つてゐる爲に、その位の高さでも未だ雄大な針葉樹が並んでゐるが、それが皆んな枝も樹幹までもまるまる雪で包まれて、まるで人工的に雪で堅めたやうだつた。元來雪

の針葉樹は何時如何なる場合にも美觀をもつものであり、今更それらに就いて作文例範的叙景をするつもりはないがしかしそれを遠くから見た時には岩に雪が凍りついてゐるものとばかり思へた程、それは眞白な塊だつた。まるで砂糖菓子^{シュワッペン}のやうに、——といつても勿論それは味覺以前の感覺で、光學的な實體だ。それはまた美しい童話の王國で、壯麗な宮殿の入口である。畫家はこの世界を表現する色彩をもつてゐない。詩人は自ら言葉^{オのツカ}を失ふであらう。何故といつて、それは藝術のオリヂナルであるからだ。

4

湖の景觀は前にも書いたやうにさ程優れたものではない。賣幕市街あたりからならば、白い屏風を立てたやうに、雄大に見えるウベサンケヌブリの連嶺も、湖の畔^{ほとり}からは四圍の山に隠れて少しも姿を現はさない。その四圍の山も決して美しい姿態はもつてゐない。けれども、この湖を訪れる人は誰しも三歎してあらゆる美辭を惜まないであらうところの、一つの廣大な景觀がある。

賣幕の村落を過ぎて里餘、道は漸く西ヌブカウシヌブリ

の山腹をゆるやかに縫つて登り、東西兩ヌブカウシに差挟まれた海拔やうやく三千尺の扇ヶ原峠に導かれる。その傍邊より遙かに眺める曠茫たる十勝平原の展望風景がそれである。それは全く一つの甚だ特色ある、而も私の知る限りに於て最もひろやかな雄大な平原展望なのである。

十勝平原の端にある賣幕の村邑から登山口邊までは、例の北海道特有な燒棒杭のまばらに突立つた萱の茂つた平坦な道である。その雪の平原の向ふに、雪の少いヌブカウシヌブリ(萱の多く茂れる山の意)が丸く盛り上つてゐる景色は、淡彩的な繪畫風な趣がある。それが、登山口から長い坂を上つてひろびろとしたテレスに出ると、ここはまた何と素朴な牧歌的な風景だ。その幅十町程もある長く広い臺地はすべて萱の草原で、私に刈り採つた積萱がいい間隔に盛られてゐる。そこからもう目の前に廣大な平原が展開されてゐるのであるが、私はそこでは寧ろその臺地そのものの風致を愛する。それは確かに曲線と高低の音律に富んだ音樂的な風景だ。そしてその臺地の端のちよつとした傾斜地に、一つの小さな緬羊の牧場があるのだ。由來牧場のある景趣は、言ひ古された言葉だけれども概ね素朴で牧歌

的な諧調に富んだ處が多い。それは、地味が高燥で大氣が澄明な草原にある爲であらうか。ここもまたすべてのものがさういふ雰圍氣に融け込んでゐる甚だ愛すべきところなのだ。通りすがりの私はその小さな牧場がどんなものであるか、その内容なんかで知らない。ちよつと見たところでは、未だ莫迦に貧弱なやうでもあるし、牧場の人達もよく知らないけれども、とにかくこの牧場を中心として、近頃羊ヶ丘と名附けられた、そのひろやかな臺地をそこら邊傍では一ばん私は愛するものだ。そしてそれは、今までに私に残された印象のうちでも、最も深いものの一つである。それから道は西ヌブカウシ山の山腹を斜に峠の方へ登つて行くのであるが、その甚だ勾配のゆるやかな一里餘りの坂道も、決して退屈なものではなかつた。殊に、だんだん擴つてゆく視野のうちに牧場の次第に小さくなつてゆく景色を眺めながら、或る時は黙りこくり、或る時は好きなリードでも口づさみながら、一つの大なる展望にまで導くその馬鬣道に、ゆつくりと軌るスキーを運んで行く時にはそれは寧ろ楽しいひと時だ。そんな時にこそ、一人旅の心安さはほんとうに味へるものである。そして漸く峠の頂に

たつて眺める内顧的な、湖を圍む山懐と、外望的な曠漠たる雪の平原展望！それはまさしく、かかる僅かの勞力の代償として享けとるには餘りにも大きい贈物だ。私はそこで思ふ儘に打ち寛ぎ、その彼方延々連亘する日高山脈を脊にした雪の十勝平原をば、飽くこともなく二つの網膜にとり入れた。そして、冬の靜穩な夕暮近く、湖畔へと一條の馬橋道をいつきに滑り下りて行つた。

5

最後に、このあたりの極く簡単なトポグラフィと行程の時日を書き加へておかうと思ふ。これは全く私自身の爲めの覚え書きに過ぎないのであるが。

十二月二十九日午前五時三十分新得發(北海道拓殖鐵道)

鹿追着(六・五二)スキーをはいて發(七・一五)―賣幕(一

〇・〇〇―一〇・四五)―登山口(一一・四〇)―テレス上

(十二・〇〇)―小室牧場(〇・一五―〇・三〇)―扇ヶ原峠

頂上(一・五〇―二・一〇)―然別湖畔(二・二五)―温泉(三

〇〇)

現在然別沼へ行く最も近道は、昨年十二月十五日に開通

したばかりの北海道拓殖鐵道(新得から上士幌へ通ずるもので、今年中に全線開通の豫定ださうだ。そうすれば賣幕を通るから、そこまで鐵道を利用すればいい。清水から鹿追迄河西鐵道といふ輕便があるが、列車も悪いし時間もすつと多くかかる)で鹿追迄行き、そこから賣幕を過ぎて西ヌブカウシの山腹の登山路を登るものである。尤も夏季間は帶廣から登山口迄自働車が通ずるさうだ。鹿追から登山口迄は例の直線的な平坦な道である。この日は一日中快晴で、鹿追では平原の彼方はるか地平線上に昇る日の出を見た。この邊から眺めた日高山脈もなかなかいい。雪はまるで少くて五寸程しか積つてゐなかつた。それで始めのうちには馬橋道を擔いだり滑つたりした。それからこの邊は菅が頗る多い。ヌブカウシとはアイヌ語で「菅の多く茂つた」といふ意味ださうだが、まつたくさうだ。ヌブカウシヌブリを「平原の上に聳える山」と解してゐる人もあるが、バチエラーさんのアイヌ語辭典にも前説を擧げてゐるし、昔長い間測量隊に働いた芽室村の水本文太郎といふ舊土人もさういつてゐたから、やつぱり菅で被はれた山といふ方が正しいやうだ。もつともそれは確に平原の上に聳え立つ山

には相違ないけれども。ついでにもう一つ二つこの邊の地名について書いてみると、鹿追はアイヌ名のクテクウシに

當てたもので、往昔はこの邊で鹿を捕獲する爲に長い牧柵のやうな柵を作つてその中に鹿を追ひ込んだ處ださうだ。

賣幕(ウリマツク)は「丘の傍側」といふ意味ださうだ。

それから賣幕(瓜幕とも書く)あたりから、シーシカリベツの溪の奥に白い豪壯な屏風を立てたやうに見えるウベベサンケヌブリは、雪解の水を多くいつまでも流す山といふ意味ださうだ。たしか大島君も書いてゐるが、北海道を旅するものにとつて、その先住古種族のもつた甚だ素朴なトポノミイは、たしかに一つの愉しみをもたらすものだ。

いつたいに十勝の國は札幌などに較べるとずっと寒い。

しかしまた雪の量はひどく尠い地方だ。そのために日高山脈や音更川上流の山々のスキー登山は、甚だ困難になる場合が随分とある。おまけに十勝名物といはれる位に風の吹くところだ。それがまた強烈な疾風となつてあの曠漠たる平原を吹きまくるのであるから、降る粉雪は積る間もなく吹き飛ばされて了ふのだ。だから俗に羊ヶ丘と呼ばれるあの牧場のある臺地の上も、雪は至つて少なかつた。もつとも

歸へりには、この邊に稀な大雪が降つた爲に、臺地の上にもかなり積つてはるたが。

東西ヌブカウシ山の間に挟まれた「見はらし峠」とも、

「扇ヶ原」ともいはれる峠の、湖を圍む内顧的な山懐と、

外望的な平原展望と、そのコントラストのこれ程にも著しいものをもつ處は稀だ。それには兩ヌブカウシの南北山側が、この峠の頂を通る一線を劃して植物生態を全然異にしてゐるのも、さういふ特異なコントラストの原因の一つであらう。即ち外方の南面には全く樹木が無く菅草のみで被はれてゐるに反し、内側の北面には樹木が密生してゐるのである。どうしてこんなにはつきりとした區劃を生じたものか、私はよく知らないけれども、恐らくは春季南面の雪の解けた頃に山火事があつて、南側はずつかり焼き拂つて仕舞つたけれども未だ残雪の多い北側はその災厄からまぬかれたものであらうか。それにしてもそれは何時の頃なのか。またヌブカウシといふ名の付けられたのはそれより以前なのか、以後なのか。それらの事に就いても私は全く知らない。しかしその原因なんかは植物學者の問題だ。私は唯常識的にそんな事を考へたのだが、とにかく南と北でま

るで山の様子が違つてゐることは、その峠からの眺望の特異性の一つのファクターであることは事實なのだ。

三十日(晴) 温泉(八・三〇)―ヤンベツ川口(九・二〇)

―二股(一〇・〇〇)―二股の突當りの尾根を登る。九

〇〇米附近迄造材樵道あり―一三〇〇米(〇・三〇)―

一四〇〇米附近(一・〇〇)降る―ヤンベツ川口造材小

屋(一・三〇)―温泉(三・二〇)

湖の四圍の山は何處も樹木が密生してゐてスキーで登るには適しなかつたから、ウベベサンケからの尾根續きの峯へ登つてみたのである。造材小屋はヤンベツの湖に開く川口にあつて、伐材は、音更側との境近く迄はひつてゐるといふことであつた。こつちから、音更側のヌカピラ温泉の方へ越してみるのも面白いと思ふ。湖水は四月末まで凍つてゐて通行には差支ないさうだ。もつとも氷の上は解けてザクザクになるといふ事だが。温泉からヤンベツ川口迄は直線にして一里程ある。温泉附近は雪は二尺程であつたが一四〇〇米附近では四五尺あつた。書き忘れたが、ここの温泉といふのは大正十二年から經營され始めたので、地形圖(然別沼)には出てゐない。峠から湖畔への道は丁度ト

―マベツの入口の處に出てゐて、温泉も驛遞もそこから西側の岬を一つ越したところにある。前にも書いたが、温泉はぬるいのが缺點だ。今年は建物を擴げるといふことだ。現在では家は唯此の二つきりだ。

三十一日。快晴、午後曇ル。此の日は西ヌブカウシに

登つてみるつもりで峠迄行つたけれども、雪が浅く、菅がほそほそ伸びてゐてスキーでも落ち込むので、峠からまた温泉に引き返して了つた。湖畔から峠まで登りは三十分、

降りには十分。夜になつて吹雪となる。

一月一日。吹雪。昨夜からの積雪二尺、吹雪のため賣幕あたりでも馬糞も通らない。峠からの下りも吹き溜りでよく滑らない。鹿追まで深い雪を一人でラッセルをした。

温泉(九・〇〇)―峠(二〇・〇〇)―收場(〇・三〇)―

四五)―賣幕(二・〇〇)―三・〇〇)―鹿追(五・四〇)

この短いスキー旅行の後、帯廣で日高山行の一行と落ち

合つて、戸蔭別川を遡行、トツタベツ山と日高峴尻山とに

登つた。

岡村源太郎遺稿集

スキーデイズタンスレース

完成

限定五〇〇部

体裁 菊判 三三〇頁 假製綴

紙質 上質紙 寫眞版六葉

實價 金貳圓

發兌 札幌 山ミスキーの會

小樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稻穂町梅屋運動具店宛にお願い申します。

山ミスキーの會



SKI HEIL

スキ一
ト
其用與全般

中野商店

スキ一即ダバ

第一
斯界
大愛 教 産

札幌



GET SUPERFINE SKEES.
AND MAKE AN
EXCELLENT
RECORD!



具用其ト一キスルナ秀優

樽 小

店 具 動 運 屋 梅

北海帝國大學キス一部及同岳部御用



登山靴とキス靴

各種

札幌市南一條十街

木本靴店

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることをお願いします、又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、O・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和四年一月廿八日印刷

昭和四年二月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替水簿八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo

No. 90. Februaro 1929. Sapporo. Japanujo.

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和四年一月二十八日印刷
昭和四年二月一日發行
本行

—メタに比類なき—
冬期登山・家庭・旅行に
携帯便利・安全燃料

『META メタ』

50錠入一函 ¥ .80

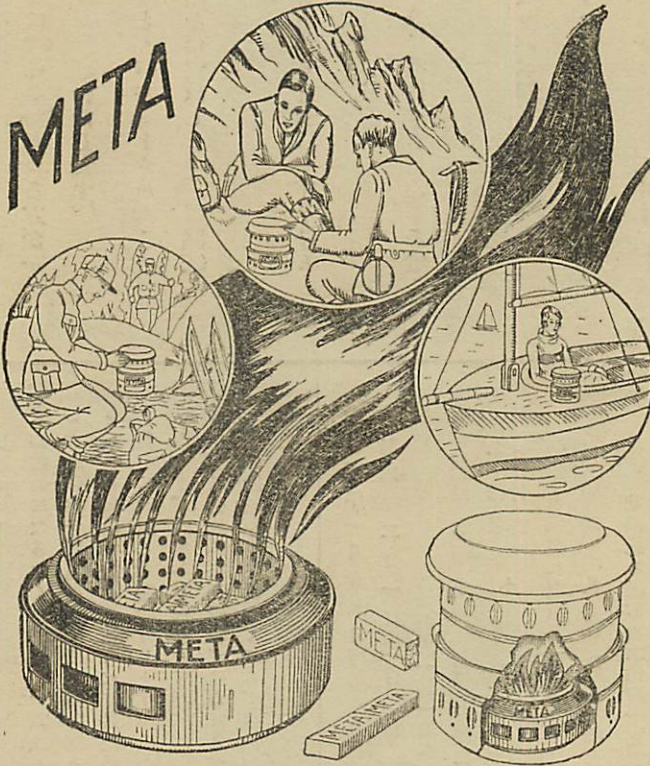
メタ、コツヘル・アブラート (アルミ製炊事具の類)

No. 80 (2pints)	¥ 4.50	No. 90 (フライパン)	¥ 1.50
MARIO (1½")	¥ 3.00	No. 50 (META-BURNER)	¥ 1.65
No. 70	¥ 2.50		

北海道地方

梅屋運動具店・富貴堂・小谷運動具店
今井呉服店・川口屋銃砲店運動具部

品切れの節は
直接美満津へ



全國運動具店にあり・メタに比類なし

瑞國「メタ」安全燃料 日本運動具店總代理店
及びアルミ容器

名社
合會

美満津商店

東京 本郷 赤門前

振替口座 (東京) 760
電話 (小石川) 845

山とスキー 第九十號

定價金參拾錢